

## 「サム・ピッグのお話」をめぐって：農場の挽歌

著者名(日)	中野 節子
雑誌名	Otsuma review
巻	29
ページ	37-50
発行年	1996-07
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00004222/">http://id.nii.ac.jp/1114/00004222/</a>



# 「サム・ピッグのお話」をめぐる

## ——農場の挽歌——

中 野 節 子

‘... Everything has life. If there is one thing science teaches you, it is that. Once you have grasped the structure of the atom, you realize that everything is alive, even metals, minerals, so-called inanimate objects; so you see, even Sam Pig and Grey Rabbit are alive, in their own fashion. Life is a many-sided thing.’<sup>1)</sup>

「リトル・グレイ・ラビットのお話」や「ティム・ラビットのお話」シリーズの最初の作品を発表し<sup>2)</sup>、イギリスの田園に暮らす小さなウサギたちを主人公にした、優れた動物ファンタジーの書き手としての地位を確立しようとしていた A・アトリー (Alison Uttley: 1884-1976) は、今度は彼女が生まれ育った小さな農場に飼われているブタを主人公にした動物物語の創作に没頭する。そして生まれたのが、サム・ピッグ (Sam Pig) というブタの坊やと3人の兄姉たち、それに彼らの後見役アナグマのブロック氏を中心に繰り広げられる一連の物語であった。その結果、『4匹のブタとアナグマのブロック氏のお話』(*Tales of the Four Pigs and Brock the Badger*, 1939) から始まって、『サム・ピッグの物語の本』(*The Sam Pig Storybook*, 1965) までの13冊の本が、約30年近くにわたって、4人の挿絵画家の協力のもとに生み出されていく。

アトリーという作家は、「わたくしの専門は物理学、詩的な科学」(‘My subject is physics, the poetic science.’) という自負を持ち、「動物たちは、神秘的で、人間から遠く離れたところにある種族だ。物語や寓話の中に擬人化するのには余りにも気高い生き物である。けれどそうすることによってしか、わたしたちには彼らを理解したり、愛することを学ぶ術がない。それは大昔のわたしたちの祖先たちが、岩も大地も生きていて、力に溢れた生命体だと感じていたあの感覚と同じものだ」と主張していた。<sup>3)</sup> 全て存在するものは

生きているという、このアニミズムの考え方こそ、動物ファンタジーを始めとするアトリー文学の核となる考えであった。「それぞれの流儀で存在している」(‘in their own fashion’) ととらえられたアトリーの身辺にいた小動物、ブタのサム一家の物語の魅力とは一体どんなものであったのだろうか。小さな子どもたち、中でも男の子の心を捕えて放さない、英国幼年文学のロング・セラーの特徴の幾つかを考えてみたい。

#### 1. 4匹のコブタとアナグマの共同生活

「サム・ビッグのお話」シリーズの第一作目『4匹のブタとアナグマのブロック氏のお話』の冒頭に置かれた「オオカミ」(‘The Wolf’) という物語は、次のように始まっている。

In a small thatched cottage by the side of a shabby lane lived four young pigs, whose names were Tom, Bill, Sam, and Ann. With them was their guardian, Brock the Badger, the wise old friend who took care of them.

Tom did the cooking, and Bill looked after the garden. Ann had charged of the work-basket and sewed the buttons on as fast as they flew off. Sam got in every-body's way for he was young and simple. The Badger wound up the clock and gave advice, and did all the clever things in the house.<sup>4)</sup>

まず主人公の5人(?)が紹介され、続いて動物たちにはそれぞれ、料理人としてのトム、庭師の仕事をするビル、ボタン付け等の家庭内の細々とした仕事を担当するアン、そして一番年下で皆の仕事の邪魔をするばかりの末っ子サムの4匹のコブタたち。そして昔話に登場する不思議な力を持つトリックスターを連想させる、知恵者のアナグマのブロック氏というふうな、役割と性格付けがなされている。このように、物語の舞台となる場所や登場人物の性格とお互いの関係等が、最初からはっきりと説明されているのが、彼女の幼年物語に共通な特色である。そしてすぐに、森に暮らす小動物たちの恐怖の的、ずる賢いオオカミとのスリル溢れる駆け引きを描いた物語が展開される。さんざんはらはらさせられた末、結局はブロック氏の助言を受けた



挿絵：Alec Buckels, *Tales of the Four Pigs and Brock the Badger* (1939), 口絵より。

4匹のブタたちが、力を合わせてオオカミを撃退することになるというお話である。この他、末っ子サムの最初の冒険のお話「サム・ピッグの宝探し」(‘Sam Pig Seeks his Fortune’)とか、雨の訪問を擬人化して、神秘的に描いた「魔法の水」(‘Magic Water’)等の12編の物語が、アレック・バッケルズ(Alec Buckels)の素朴な挿絵入りで収められている。1939年の4月にフェイバー(Faber)社に持ち込まれた最初の原稿は、あと15000語の書き足しをすることを条件に、出版の約束を取りつける。2週間で完成稿を仕上げて届けたアトリーは、8月になると、その追加の部分の出来を心配するようになり、11月にゲラ刷りが届くとすぐに、当時親しく付き合っていた挿絵画家のキャサリン・ウィグルズワース(Katherine Wigglesworth)のところへ出かけ、彼女の意見を求めた。この訪問の結果として、サム一家の後見をするアナグマのプロック氏が、主要な登場人物としての確固たる地位を与えられて、加わることになったのだと言われている。<sup>5)</sup> 出版直後の12月の各書評紙は、いずれもこの新しい動物ファンタジーの誕生を絶賛した。オブザーヴ

アー (The Observer) は 12 月 4 日の書評で、「この様々な事件のおこる、ユーモア溢れた物語に登場する動物たちは、真に個性豊かで、傑出している。本当に楽しい本である。挿絵も物語の本文にマッチし、すばらしい。」と述べ、サンディー・タイムズ (The Sunday Times) は、「4 匹の子豚の冒険物語は、沢山の喜びにあふれた、真に独創的なお話である。アン姉さんブタの存在が楽しい。」と書いている。これらの反応に力を得たアトリーは、その後次々とサム・ピッグのお話を書き続けることになった。フェイバー社との間で、前渡し金の問題でのいささかのトラブルはあったものの、1940 年の 10 月には第二作目『サム・ピッグの冒険』(*The Adventures of Sam Pig*)、そして翌 41 年には、『サム・ピッグ市へ出かける』(*Sam Pig Goes to Market*) 等が出版されていく。同年のタイムズ教育追補編 (The Times Educational Supplement) のクリスマス号は、「アリソン・アトリーの幾つかのお話のないクリスマスなんて考えられない。」と述べ、タイムズ文芸追補編 (The Times Literary Supplement) も、サム・ピッグの幾つかの物語と『ティム・ラビットの 10 のお話』(*Ten Tales of Tim Rabbit*) の書評を載せ、アトリーの散文がその「簡潔さ、透明さ、細部にわたる現実味を持って、最も空想的な出来事を、完全に説得的なものとしている」('... a simplicity, a lucidity and a realism of detail that can persuade the most fantastic event into a convincing literalness.') と絶賛しているのである。大人と子ども、両者の心を捕らえた、アトリーの空想的な動物ファンタジーの勝利であった。

## 2. アイルランドからの人々

アトリーの生まれ育った北イングランド、ダービシャーの農場には、年に一回の収穫時に、アイルランドからの季節労働者たちの一行が、旅費を前借りするかたちでやって来るのが、長い間の慣習となっていた。このことは、事件といった事件もない、静かな田舎の生活を彩る一大イベントとして、幼い女の子が待ちわびる出来事の一つであった。アイルランドの異国的な雰囲気をつつぱり漂わせた男たちの到来を、毎年女の子は首を長くして待っていたのである。特に彼らの不思議な体臭と言葉、中でもアイルランド・ケルトの音楽の調べ等が彼女の血を騒がせたことが、彼女の自叙伝的物語『田舎の子ども』の中に描かれている。<sup>6)</sup> そんな思い出が、この幼年文学の中にも、ふんだんに取り込まれていることが分かる。

ある日の朝早く、皆は森の彼方から聞こえてくる、野原で物を刈るような音で目を覚ました。アイルランドから、収穫を手伝う男たちの一行がやって来たのである。アイルランド人が大好きなサムは、早速仲間に入れてもらうために、出かけて行こうとする。最初のうちは、この小さな弟の願いを茶化しては、からかっていた兄姉たちも、サムの決心の固さとブロック氏の「あの人たちは分別のある、育ちの良いブタの持つ価値と威厳を理解する、世界で唯一の人間だ。」（‘They are the only people in the world who have sense and know the dignity and the value of a well-bred pig.’）<sup>7)</sup>という言葉もあって、サムの願いを応援してやることにする。

こうして、アンに借りた麦藁帽子をかぶり、トムに貰ったお土産用のじゃがいもとハーブで作ったビールを持ち、ヴァイオリンを抱えてサムは出かけて行く。アイルランドの労働者たちは、そんなサムを歓迎してくれ、彼らは一緒に仕事に精を出すのだった。一日の労働が終わると、同じテーブルで食事をし、アイルランドに語り伝えられたお話を聞き、サムのヴァイオリンに合わせて、古くから伝わる舞踏の一つジグ (jig) を踊った。すっかり疲れたサムを寝かしつけた後、彼らは揃って村へと出かけて行く。

They shut the door to keep him safe and then they took their sticks and went off to the village. But never a word did they speak to anyone of their small guest, for they were true gentlemen. When they returned Sam was fast asleep. Soon their snores mingle with his, and the moon looked through the top-half of the door and smiled to herself when she saw Sam in human company.<sup>8)</sup>

やがて収穫の作業も終わり、アイルランドの労働者たちが立ち去る日がやって来た。別れを惜しみながら彼らは荷物をまとめ、現われたときと同様、綺麗に洗濯したシャツを頭上に乗せ、赤いハンカチを首に巻いて去って行く。サムの手元には、家に帰ったら開けるようにと言われて渡された、小さなバスケットが残された。後でその中には、アイルランドの靴職人の妖精レプラーコーン (leprechaun) が入っていることが判明し、彼との交流を描いた、新たな物語が展開されるのである。



[挿絵：Francis Gower, *Adventures of Sam Pig* (1940), p. 100 より。]

### 3. アナグマのブロック氏

第一作目の『4匹のブタとアナグマのブロック氏』以来、主人公の4匹のブタたちと共に大活躍するのが、アナグマのブロック氏という不思議なキャラクターである。

彼の活躍に関しては、友人の挿絵画家 K. ウィグルズワースの適切な助言があったことは前述のとおりであるが、この後見役の賢人の存在なしでは、アトリーのこの動物ファンタジーの魅力は半減すると言ってもよい。作品の数が増えてゆくに従って、ブロック氏の登場の場面も多くなり、ますます重要な人物となっていく過程が分かる。最初に登場してくるブロック氏は、次のように描写されている。

The most important member was Brock. He belonged to an ancient family which had lived before Man came into the world. Badger still ruled the woodlands, and every creature gave away before him. He had a long head with black and white stripes down it, which helped him to remain unseen when the light flashed among the trees. His hair was dark brown and his feet black as jet. The little pigs admired him for his strength and courage, and his wisdom. He could climb high walls when they ran round squealing. He could squeeze through narrow spaces when they were too fat to get through. He had a big arm-chair in which no one else might sit,

and a tankard from which no one else might drink.<sup>9)</sup>

人間の存在も未だ確認されない太古からの生き物で、現在でも依然としてその支配権を森林地帯に確保する王者、彼の行くところでは誰もが彼に道を譲り尊敬の意を示す。白と黒の縞模様のある縦長の頭、暗い茶色の毛並みと黒よう石のような足を持ち、力と勇気と知恵を兼ね備えた誇り高い動物である。高くそびえる塀にも楽々と登れ、狭い空間も易々とくぐることができる。他の誰にも座らせない専用の肘掛け椅子と、専用のカップを確保しているといった重要人物として、登場しているのが分かる。

ある日の夕方、皆揃って芝居見物に出かける森の中で、はしゃぐサムにブロック氏は言う、「静かに、サム。夜になってから森を通り抜けて行くときには、動物たちは静かに歩くものなのさ。ナイティンゲールとフクロウの他には、声を上げてはならないのだよ。そっと歩きなさい、そして月の影を踏むんじゃないよ。さもないとゴブリンどもがやって来て、おまえのしっぽ引っ張り、背中にひょいと乗せて、連れて行かれてしまうから」<sup>10)</sup>と。

また英国の伝承童謡、ナーサリー・ライムの中にある有名な唄「月曜の子どもは器量良し」(‘Monday’s child is fair of face’)を下敷きに使った物語、



[挿絵：A. E. Kennedy, *Yours Ever*,  
[*Sam Pig* (1951), p. 95 より。]



「木曜の子ども」(‘Thursday’s Child’) で、アンは器量良しだからこの月曜日に生まれた子ども、優雅な物腰のトムは火曜日の子ども、いつも問題を抱えて悩むビルは水曜日の子どもで、遠くに行きたがりやのサムは木曜日に生まれた子ども、それじゃブロック氏は…と続き、「満月の、星が輝き、北風の吹く、土曜日の晩にうまれた」<sup>11)</sup>と述べられる。

また4匹のコブタと森の賢人アナグマの共同生活の様子は、次のように記されている。

In the morning after breakfast, the four little pigs did the house-work and they made the cottage clean and tidy for Brock the Badger. Everbody knows that the badgers are used to speckless dwellings, and the four little pigs bustled about to tidy up for their friend. Brock was deep in his own work, watching the weather clouds, taking notes in his green notebook with the brown pages filled with wisdom, studying his strange herbs and flowers, making medecines and cures for animals.

So while Brock walked abroad in the wide wild woods, in the hidden secret places, or while he worked in the underground rooms where he kept some of his stores, the little pigs got on with the domestic part of life.<sup>12)</sup>

実際の細々とした生活の部分を担当しているコブタたちと、蓄積された知恵とより良い生活を模索しての観察と研究を担当するアナグマとの、もちつもたれつの見事な共生の様子が伝わってくる。まさに、人間の横暴を排除したところに生まれる、理想的な田園の楽園が描かれているのが分かる。

毎日の喧騒の中で、一際きわだって賑やかなのが朝食を準備する台所の中である。ついに業を煮やしたブロック氏が、爆発する。彼は何よりも静かな思考のひとつときを大切にしていたからである。

Then the water and the kettle and the fire and the plates and everthing were silent. Sam felt lonely without the familier hubbub going on around him.

“Brock,” said he. “Why did you make them all quiet?”

“Because I can’t hear myself think,” said Brock. “I want to listen to the

air and the dust and the clouds.”

All was quiet that day and all that night. Brock went out to the woods and he enjoyed the silence and he listened to the invisible ones who floated round him, and he heard the leaves growing and the trees talking and the roots mumuring deep in the earth as they spread out their tendrils and grasped the soil. He heard the stars sing in the sky and the Dog star bark and Orion call to them, as he hunted. He forgot all about his command for silence, as he listened to, this conversation in the heavens and under the earth. Then he went home, and got up to make breakfast.<sup>13)</sup>

ブロック氏の命令ですっかりなりをひそめていた時計も、蜘蛛たちも、暖炉の炎も、雨も、風も、曙の光とともに声を取り戻し、朝の喧騒が再び台所で始まり、世の中に賑やかな生活の音が響くところで、この物語「皆んながおしゃべりする」(‘Everything Talks’)は終わっている。

#### 4. ブタという生き物

それでは何故、アトリーは野に住むウサギたちを主人公にした物語の後で、農場の人気者である小さなブタたちを主人公にした動物ファンタジーの創作を始めたのだろうか。田舎の小さな農場の一人娘として育った彼女の身边には、いつもこの賑やかで、好奇心の固まりのようなブタたちの存在があったことは事実である。村から離れて、小高い丘の上にぽつんと立つ農場には、二つ年下に生まれた弟を除いては遊び相手もなく、このブタたちは、彼らの絶好の友達でもあった。しかし、家畜として飼われていたブタたちは、いずれも毎年定期的に登ってくる「ブタ刺し」(‘pig-sticker’)の手にかかって殺され、人間たちの食卓を賑わす食物になったのだった。その命は、クリスマスを待たずに終わってしまうのである。友だちのブタが殺されるとき、悲しい悲鳴には耳を押さえて最高に抵抗はしていたものの、美味しいベーコンやハムになってしまうと話は別である。そんなことはすっかり忘れて、御馳走に舌ずつみを打つ幼い女の子の姿があった。<sup>14)</sup>しかしその心は複雑だったにちがいない。いつの日にか、人間の欲望を満足させるために、殺され続けるこんな動物たちが、永遠の命を持って生きることのできる世界の物語を書こうという決意が、強く起こって来たのも当然であった。この「サム・ピッ

グのお話」シリーズの中にも、動物たちの死後の世界を扱った不思議な物語がある。『サム・ピッグ市へ行く』の最後に収められた、「サム・ピッグ月を訪れる」(‘Sam Pig visits the Moon’)である。ある晩月に上り、そこに住む伝説的な存在である月の男の案内で、月の裏側にある地を訪ねたサムの目の前に、不思議な光景が展開される。

There were rivers and meadows and fields and woods, all bright with light, unreal and shadowless, but beautiful with green leaves and blue water and brown earth.

“Why can’t we go?” whispered Sam.

The man shook his head, and Sam saw two angels girding the way. Then from out of the trees came animals — old horses, cats, cattle, sheep, pigs — and each one walked in the grass and drank at the streams, and not one cast a shadow, or made a sound.

“Who are they?” asked Sam.

“They are animals who suffered on earth and were patient and bore their pains. This is their Paradise, on the other side of the moon. Here they live in contentment, immortal, and no pain or trouble can touch them again.”<sup>15)</sup>

しかしこの動物たちの楽園に犬の姿はない。いぶかるサムに、月の男は「犬たちはこの楽園でも、人間なしでは幸せにはなれないのだ。両者は離れ離れになれないのさ。」と語る。あらゆる動物を飼い慣らしてしまった人間、その中でも犬は最大の犠牲者なのかもしれない。

思えばケルトの古い神話・伝説でも明らかなごとく、昔ブタの先祖であったイノシシ (Boar) は、抗いがたい力を持つ神の一つであった。最古のアーサー王伝説であると考えられている、ウェールズの物語「キルーフとオルウェン」(‘Culhwch ac Olwen’)の中でも、7匹の子どもを従えてアイルランドからブリテン島に上陸し、あばれまわるイノシシの長、トルーフ・トロイス (Twrch Trwyth) の話が残っている。その後改良されブタとなった後にも、異界の王アラウン (Arawn) から、南ウェールズのダヴェドの王子プウィス (Pwyll) に贈り物として与えられたブタたちを巡って、様々な困難が起こる様子が描かれている。魔法の力でワシに変えられたスウ (Lleu) の腐

肉を食らう雌ブタ (sow), そしてとうとうこのブタを巡る戦いに敗れて、魔法使いグウィディオン (Gwydion) に命をとられることになるプウイスの息子ブレデリ (Pryderi) 等、ブタに関する物語は、枚挙にいとまがない。<sup>16)</sup>

中世以来教会のステンドグラスや腰掛けの彫刻にその姿を留めるブタたち、そして町なかの旅籠や酒場の看板に残っているブタたちを始めとして、伝承の物語や唄の中で、人々の間での彼らの人気は衰えることがなかった。<sup>17)</sup> しかしながら、時が経過するにつれて、彼らの持っていた神性に代わって、食用としてのブタの重要性が増すとともに、この力に満ちた賢い生き物は小さな空間に閉じ込められ、人間の食用としてひたすら太らせられる運命に追い込まれる。もともとは清潔好きな彼らも、人間たちの手抜きから、垂れ流しの状態で屋内に留められ、やがて確実に食肉用の動物として殺されていくのである。<sup>18)</sup> 何処の農場でも飼育されていた、この小動物を主人公にする幼年文学も、数々書かれている。まっさきにあげられるのは、アトリーと並んでの優れた動物ファンタジーの作者 B・ポター (Beatrix Potter, 1866-1943) の作品であろう。特に彼女が結婚直前の年に発表した作品『コブタのピグリング・ブランドのお話』(*The Tale of Pigling Bland*, 1913), そして『コブタのロビンソンのお話』(*The Tale of Little Pig Robinson*, 1930) はよく知られている。またアメリカの作家 E・B・ホワイト (Elwyn Brooks White, 1899-) の『シャーロットの蜘蛛の糸』(*Charlotte's Web*, 1952) に登場する、未熟児のコブタのウィルバー (Wilbur) の存在も忘れ難い。

愛する人々の死を悼み、「誰もが死ぬことのない自分だけの物語を描こう」(‘... , and she decided she would make her own tales where nobody died.’)<sup>19)</sup> と決心した作家 A・アトリー。彼女の創作物語の世界では、ただ単に人間ばかりでなく、幼年時代を共に生きた動物たちもまた、永遠の命を与えられて息づいている。中でも、人間の命を支えるためにその小さな命を供せられ続けたブタたちへの思いは、ことさら深かったと思われる。そんな彼らを主人公にした動物ファンタジーが、幼い子どもたちに捧げられていることの意味は大きい。

それはまさに、天寿を全うすることのできなかった農場の動物たちへ捧げられた、一つの鎮魂歌であるからである。



〔挿絵：Cecil Leslie, *The Sam Pig*  
*Storybook*(1965), p. 51 より。〕

### 注

- 1) Alison Uttley, 'Poetic Scientist', *The Times*, 29 December 1959.
- 2) 「リトル・グレイ・ラビットのお話」シリーズ(35冊)の最初の物語 *The Squirrel, The Hare and The Little Grey Rabbit* は1929年に、また「ティム・ラビットのお話」シリーズ(5冊)の最初の物語 *The Adventures of No Ordinary Rabbit* は1937年に既に出版されていた。
- 3) Alison Uttley, op. cit.
- 4) *Tales of the Four Pigs and Brock the Badger* (London: Faber & Faber, 1939), 'The Wolf', p. 11.
- 5) Denis Judd, *Alison Uttley: The Life of a Country Child* (London: Michael Joseph, 1986), p. 169.
- 6) *The Country Child* (London: Faber & Faber, 1st illustrated edition, 1945), 'The Harvest', pp. 191–202.
- 7) *Adventures of Sam Pig* (London: Faber & Faber, 1940), 'Sam Pig and the Irish-men', p. 91.
- 8) *Ibid.*, p. 102.
- 9) *Tales of the Four Pigs and Brock the Badger*, 'The Wolf', pp. 13–4.

- 10) *Adventures of Sam Pig*, 'The Thaeatre', p. 129.
- 11) *Sam Pig at the Circus* (London: Faber & Faber, 1943), 'Thursday's Child', p. 10.
- 12) *Sam Pig in Trouble* (London: Faber & Faber, 1948), 'Lazy Old Sam', p. 9.
- 13) *Sam Pig Goes to the Seaside* (London: Faber & Faber, 1960), 'Everything Talks', pp. 54-5.
- 14) *The Country Child*, 'Serving-Men', pp. 54-5. etc.
- 15) *Sam Pig Goes to Market* (London: Faber & Faber, 1941), 'Sam Pig Visits the Moon', pp. 250-1.
- 16) Gwyn Jones & Tomas Jones (trans.), *The Mabinogion* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1949) 参照。
- 17) F. C. Sillar & R. M. Meyler, *The Symbolic Pig* (Edinburgh & London: Oliver and Boyd Ltd., 1961) 参照。
- 18) Sidney Rogerson & Charles Tunncliffe, *Both Sides of the Road* (London: Collins, 1949) 参照。
- 19) *The Farm on the Hill* (London: Faber & Faber, 1st illustrated edition, 1949), 'Country Nights', p. 22.

### Bibliography

('Tales of Sam Pig')

1. *Tales of the Four Pigs and Brock the Badger*, illustrated by Alec Buckels (London: Faber & Faber Ltd., 1939).  
... 'The Wolf' 等の 12 話収録。
2. *Adventures of Sam Pig*, illustrated by Francis Gower (London: Faber & Faber Ltd., 1940)  
... 'Sam Pig's Trousers' 等の 12 話収録。
3. *Sam Pig Goes to Market*, illustrated by A. E. Kennedy (London: Faber & Faber Ltd., 1941).  
... 'Sam Pig Goes to Market' 等の 13 話収録。
4. *Six Tales of the Four Pigs*, illustrated by Alec Buckels (London: Faber & Faber, 1941).  
... 'The Wolf' 等, *Tales of the Four Pigs and Brock the Badger* からの 6 話収録。
5. *Six Tales of Brock the Badger*, illustrated by Alec Buckels and Francis Gower (London: Faber & Faber Ltd., 1941).

- ... 'The Performing Pig' 等の 3 話を *The Tales of the Four Pigs and Brock the Badger* から, また 'The Leprechaun' 等の 3 話を *Adventures of Sam Pig* から収録。
6. *Six Tales of Sam Pig*, illustrated by Francis Gower (London: Faber & Faber Ltd., 1941).  
 ... 'Sam Pig's Trousers' 等の 6 話を *Adventures of Sam Pig* から収録。
7. *Sam Pig and Sally*, illustrated by A. E. Kennedy (London: Faber & Faber Ltd., 1942).  
 ... 'Introduction and Sam Pig Goes Camping' 等の 12 話収録。
8. *Sam Pig at the Circus*, illustrated by A. E. Kennedy (London: Faber & Faber Ltd., 1943).  
 ... 'Thursday's Child' 等の 11 話収録。
9. *Sam Pig in Trouble*, illustrated by A. E. Kennedy (London: Faber & Faber Ltd., 1948).  
 ... 'Lazy Old Sam' 等の 12 話収録。
10. *Yours Ever, Sam Pig*, illustrated by A. E. Kennedy (London: Faber & Faber Ltd., 1951).  
 ... 'Sam Pig Writes a Letter' 等の 12 話収録。
11. *Sam Pig and the Singing Gate*, illustrated by A. E. Kennedy (London: Faber & Faber Ltd., 1955).  
 ... 'Brock the Badger's Birthday' 等の 13 話収録。
12. *Sam Pig Goes to the Seaside*, illustrated by A. E. Kennedy (London: Faber & Faber Ltd., 1960).  
 ... 'Rags and Bones' 等の 16 話収録。
13. *The Sam Pig Storybook*, illustrated by Cecil Leslie (London: Faber & Faber Ltd., 1965).  
 ... 'The Billy Goat' 等の 4 話を *Tales of the Four Pigs and Brock the Badger* から, 'Sam Pig's Trousers' 等の 12 話を *Adventures of Sam Pig* から, 'Sam Pig Goes to Market' 等の 9 話を *Sam Pig Goes to Market* から, 'Dinner for Brock' を *Sam Pig and Sally* から, 'Thursday's Child' 等の 6 話を *Sam Pig at the Circus* から, そして 'Brock's Watch' 等の 3 話を *Sam Pig in Trouble* から, 全部で 35 話収録。

尚 1989 年より, Graham Percy の色彩挿絵入りの新版が, フェイパー社から 12 冊出版されている。